

序

理学療法士（PT）や作業療法士（OT）などのリハビリテーション専門職（リハ職）にとって、ADL（日常生活活動）は、最も重要な概念の1つである。医学は生命を救うことを第1目的として、臓器、細胞、分子と分割することで人間を理解しようとしてきた。しかし慢性疾患や障害を持ちながら日々を送る人を援助するリハビリテーションの実践のためには、それだけでは足りない。その人の生活における活動を知り、そこに直接援助する必要がある。その人がどのようにベッドから起き上がり、どのようにトイレまで行って用をすまし、どのような活動に楽しみを見出しているのかを知り、そこに援助しなければならない。その意味で、リハ職にとって、ADLは最も理解しなければならない概念の1つであり、その指導・援助は、最も実践できなければならない技術の1つである。

本書は、そのように重要なADLの介助法や指導法について、初学者や学生でも理解できるようイラストを多用してわかりやすく解説することを目的として作成された。その特徴として、片麻痺・四肢麻痺・対麻痺の基本動作については介助法と指導法を併記したことが挙げられる。リハ職にとっては、介助することが主業務ではないものの、自分で適切な介助ができないと、実際の臨床では大変困るし、また適切な練習指導もできるようにはならない。本書を利用する読者には、まず第3章で、基本となる介助法や指導法を学んで欲しい。

また本書は、PT・OTが共通して使用できることを目指して刊行されているテキストシリーズの1冊である。PT・OT固有の専門性に関する議論はさまざまあるが、今後は今までよりも固有の専門性の根元で共有している考え方・知識・技術がより重要となる、地域を意識したリハビリテーション援助が求められる。その中で、PT・OTはもとより、その他の保健・医療・福祉職、さらには一般の地域の人々との連携が必要となる。適切な連携をするための共通言語としてADL（あるいはICFにおける活動）は、今後さらに重要性を増すであろう。本書がPT・OTの枠を超えて多くの人の適切な連携に寄与することも期待したい。

最後に、臨床や教育・研究でお忙しい中執筆いただいたPT・OTの先生方、編者の気が付かない細かいところまでお世話くださった羊土社編集部の方々に、写真やイラストのモデルになっていただいた対象者の皆さまに深謝申し上げたい。

2015年9月

編者を代表して
下田信明